



カトリック町田教会
町田市巾町 3-2-1
電話 042-722-4504
FAX 042-722-4512

いかずちの子

<http://www.machida-catholic.jp/>



イエズス
マリア
ヨゼフ

(射禱より)

共に一つの天を

主任司祭 林 正人

八月末、女子校ミサの説教の参考にするため、一冊の本を購入しました。タイトルは『マーシャの日記』。十三歳から十八歳の間を、ゲットー

(ユダヤ人居住区)と強制収容所で過ごし、ナチス・ドイツの迫害を受けた、リトアニアの少女の日記です。「ナチに迫害された少女の日記」と聞いて誰もが思い浮かべるのは『アンネの日記』でしょう。しかし書店に行くと、アンネと同世代の少女のホロコース

ト体験記というのは、「もう一人のアンネ・フランク」と銘打って、幾つか棚に並んでいるのです。

その中でこの『マーシャの日記』を選んだのは、『アンネ』その他と違う、ある特徴が、この本にあったからです。それはこの日記が、迫害前に書かれたものではなく、戦後に振り返って書かれたものでもない、迫害を受けていた正にその時、リアルタイムで記されたものということ

です。しかもこの日記、初めはリトアニア語で書き起こされたのですが、すぐに、ユダヤ人が使っていたイディッシュ語に改められています。つまりマーシャは、殺されて、自分が語れなくなった場合、一人でも多くの人に日記を読んでもらおうとしたのです。十代前半の少女が、そんなことまで考えて日記を綴る、その事実に驚かされます。更に内容は：例えば、ナチの兵隊に殴られて歯を折られたこと、破裂弾で殺された人の脳みそを処理したこと、隣の人にしがみついて寝ていたら、翌朝その人が死んでいたこと：地獄さながらの日々が克明に記されています。

ただでさえ、ドイツ兵やカポの気紛れで殺されるか、電流の通った鉄条網に飛び込んで自ら命を絶つたかの、極限の状況。日記が見付かれば、間違ひなく処刑されていたでしょう。そのような中で、何故マーシャは日記を書き続けたのか。それは、地獄の時代を生き抜いた者の、「未来の平和に対する責任」。そして、「未来の人類に対する愛」が、この少女を衝き動かしていたのではないのでしょうか。ドイツ人も含めた総ての未来人が、一つの天を戴いて、兄弟として生きる。そんな未来を祈っ

神山復生病院訪問記

運営委員会議長 一村 弘幸

この日記は記された：私にはそう思えてならないのです。自身もナチスに迫害された政治哲学者ハンナ・アーレントによると、ナチの中に「人道に反する罪」が芽吹いたのは、彼等が、ドイツ国内にいる「ユダヤ人」という一つの民族と、「共に生きることを拒否」した瞬間だったといえます。つまり、「自分と違う人間が、自分の傍に」と、これこそが「人間の条件」であり、「人類」だと彼

8月23日に、静岡県御殿場市にある「神山復生病院」を訪問しました。この病院は、明治19年にパリ外国宣教会フランス人司祭で初代院長であるテストヴィド神父が創設され、6代目院長、哲学者でもある岩下壮一神父(1889年-1940年)とカトリック信者である看護婦長の井深八重さん(1897年-1989年)が、ハンセン病の看護に生涯を捧げたところです。今は一般財団法人神山復生病院という名称で、病院に付属する教会と記念館、クリスト・ロア宣教修道女会があります。

女は語るのです。『「違う人」と共に「同じ天」を戴く』、これが「人類」です。今の世界は：「人類」でしょうか？ 今の日本は：「人類」でしょうか？ 教会は？ 人間がいかに自分の傍に隣人を拒否しようと、頭上の天は「一つ」。唯一の神に創造された人間は、何時この事実に気付くのでしょうか。「御旨の天に行わるる如く地にも行われんことを」

この病院の創設は、テストヴィド神父が宣教活動の途中

に御殿場で一人の女性ハンセン病患者と出会い、社会で放置された同病者の救済を思い立ち、御殿場の鮎沢村(現在の御殿場市新橋)に家屋を借用して6名の患者を収容したことから始まりました。その後、神山に場所を移し、日本初のハンセン病の療養施設として多くの病者が治療生活を送ってきました。

岩下神父はカトリック司祭ですが、哲学者でもあり、大正時代から昭和初期の日本におけるカトリック教会の精神的指導者と言われています。東京帝国大学文学部哲学科卒業・大学院修了、その後、旧制第七高等学校教授を務め、文部省の国費留学生とし

てフランス、ベルギーなどの大学に留学、大変優秀であったことから東京帝国大学教授を嘱望されていましたが、生涯を一司祭として、司牧、宣教、学究、ハンセン病患者の福祉に命を捧げることがを決意し、特にハンセン病患者の養護に尽力したことで有名です。

井深さんは、同志社女学校（現在の同志社女子大学）を卒業後、長崎県立長崎高等学校の英語教師となったのですが、病院でハンセン病と診断され、御殿場市の山深くにある神山復生病院に隔離入院させられました。3年後に誤診であったと判明しますが、病院に留まってハンセン病患者の看護を使命とすることを決意、看護婦学校で資格を取り得し、病院初の看護婦となりました。父親は衆議院議員を務めた井深彦三郎で、ソニーの創始者である井深大は遠縁にあたります。当時は、ハンセン病やその患者に対する激しい差別と偏見が存在した時代であったにも関わらず、山深い僻地にあり、しかも極貧状態だった神山復生病院で婦長として献身的な看護にあたり、生涯をハンセン病患者の救済に捧げました。その活動は国際的に高く評価され、教皇ヨハネ23世より聖十字勲章、赤十字国際委員会よりナイチ

ンゲール記章などを受章、日本カトリック看護協会の初代会長に就任しています。

記念館は、ハンセン病への理解と、ここで暮らしてきた方々の歴史を後世に残すために開館し、岩下神父と井深八重さんの遺品などが展示されています。病院付属の教会の聖堂で心静かに祈りを捧げ、近くにあるカトリック墓地で、テストヴィド神父、岩下神父と井深さんが眠るお墓にお祈りをしてきました。

財務中間報告

財務委員長 坂井 剛

「町田教会の財務中間報告をお願いします」とのことなのですが、今年は8月迄の献金収入が少し落ち込んでいるのです。この状況はこれから改善されることを期待し、また収支や外壁改修工事費用に関する詳しい説明は信者総会にさせて頂くことにし、今回は9月に行われた東京教区の財務担当者会議の報告をします。

会議は「東京教区の司祭の平均年齢は六十五歳になり、既に始まっている一人の司祭が複数の教会を担当する動きが加速する。信徒の協力がこれまで以上に必要になってくる」などの厳しい話から始まりました。

今、日本の司教団が大切だと考えている諸問題について教会の命に対する教義とともにまとめた。2章以降を全面的に改めた。混迷を続ける現代社会の中で「時のしほし」を見極め、いのちの尊厳とつながりを深く尊重するよう変えることなく訴えていくメッセージ。いのちへのまなざしを読んで解説!

平和旬間 町田教会における岡田大司教の講演とミサ(8月5日)

21世紀への司教団メッセージ 増補新版

いのちへのまなざし

岡田武夫大司教の講演と平和を願うミサをルポ(池永)

命にかがめる諸問題について司教たちが伝えたいと思ったメッセージをみんなが共に考えていければ幸い!

神が人間を創造し、祝福された。

誕生 → 死

直面するいろいろな困難

どのように受け止めるか? 理解するか?

どのように役割を担えるか?

尊厳 尊重

司教団

現代社会

著しい進歩

科学技術 原子力発電

暴力 戦争

いのちへのまなざし

完全に 十全に 生きることができるよう

送る

いのちへのまなざし

大切な! その尊厳について新しかった!

全面的に書き改めた!

いのちへのまなざし

増補新版

多角的

諸問題

イエスはどんな人も排除しなかった

3章の指針

「ラウダート・シ」とともに暮らす家族を大切に」

15年5月24日

教皇フランシスコの回勅

Laudato si mi Signore

「ラウダート・シ」(主に賛歌)

アッシジの聖フランシスコの祈り

「太陽の賛歌」の中の

「ラウダート・シ・ミ・シニョーレ」

から

ラウダ (賛歌)

あなたを称えます、私の主よ...

2017年 町田教会ヤコブ祭

招かれて 主に結ばれよう

●日時 10月15日(日)11:45~14:45

●会場 カトリック町田教会

◆物販部門 11:45~13:45(2時間)

町田教会ならではの多彩なお店が立ち並びます。

♥どうぞお立ち寄り下さい!

★子供企画「わくわく宝さがし」は
11:45~12:45に開催!

◆発表部門 ▶第1部 聖堂にて 12:45~13:45

♪ギターアンサンブル ♪シスター合唱 ♪ライアー

十サブライズ発表あり

▶第2部 信徒ホールにて 14:00~14:45

♪林神父様のギターと共に全員合唱

「マリアさまのこころ」(子供達と手話サークルによる手話付)

「花は咲く」

町田教会の教会家族が一堂に会する貴重な機会です。

神さまの愛が輝く楽しい秋の一日になりますように皆様のお力添え・ご来場を心よりお願い申し上げます。

”町田教会ヤコブ祭”実行委員会 一同

教会財務の仕事も各教会の独自の会計システムでなく、汎用性のあるシステムに変更される予定です。

「おらが教会・私たちの財産」といった感覚の共同体ではなく、正しい情報共有され、自主的で「色々な行い」に対してもしっかり説明ができる共同体にしなければならぬのです。財務的には、教会は予算準拠主義ですから予算を決めて物事が行われますが、予算の使われ方を含め管理・説明責任がこれまで以上に厳しく求められるのです。話を改めて「献金」についてですが、町田教会で献金収入が一番多かった年を想像でき

ますか? その年は平成十六年なのです。あと四年で教会建設の借金返済が終わる!と、皆で頑張っていた頃です。

現在、世帯数は微増なのですが、「月定献金」をしてくださっている世帯は減少傾向になっています。財務担当者として気になるのですが、今、大切なのは「献金を何に使うか」皆での合意作りではないかと思っています。

林正人神父を中心に皆でしっかり話し合い、開かれた明るい共同体にしていきたい。もう、「献金」は皆で支え合うものです。財務も頑張ります。ご支援よろしく願います。

2017年平和旬間

岡田大司教ミサ

(8月4日)

特別
寄稿

歩む巡礼『平和!今、ここ!』

セルヴィ・エヴァンジェリー宣教師の会 アネタ・ブオネツカ

8月17日から20日まで『平和!今、ここ!』というテーマの徒歩巡礼に参加しました。巡礼地は北朝鮮との国境に近い韓国です。参加者は日本と韓国の若者達と、私たちセルヴィ・エヴァンジェリーの宣教師です。三日間歩き通し、平和のお祈りと分かち合いをしました。

初日は『世の中の平和のために祈りましょう』というテーマで、北朝鮮のために祈りました。北朝鮮は国全般的に厳しいと聞きます。その中で、とくに苦しんでいる希望を失っている方々を想って歩きました。二日目のテーマは、『世の中の平和は私たちの心から始まる』。国家間に平和がない理由は、人々の間に平和がないからです。

家族の中に平和がないと、自分の心の中にも平和がない、ということについて分かち合いました。

歩いた距離は約30キロで、あつという間でしたが、とても素晴らしい体験でした。歩き、祈り、分かち合いするメンバーたちは、それまでは見知らぬもの同士だったのに、巡礼を通して、家族になったような親しみを感じる体験をしました。とくに、日本と韓国の若者たちは、いろいろな話題をもって話をしながら、心からの友だちになりました。私達の平和を願う小さな努力が集まると、それが大きな力となり、さらに世の中の平和へと一歩進めることができる

と確信、体験した巡礼でした。



夏期学校

8月4日~5日

中高生会練成会

8月26日~27日

▲町田教会に宿泊 富士急ハイランドで夏を満喫。

▲御岳山にてハイキング、花火、キャンドルサービス、ミサ、ゲーム大会と楽しい一泊二日を過ごしました。



平和旬間特集Ⅱ

孤児たちと死線を越えて(下)

中村 登美枝

親を亡くした孤児たちの面倒をみてほしいと、寮の団長が来た時、私は下の便所まで歩くのがやっとという状態だった。でも、5枚の畳を敷いた電気もない部屋で生活する子供たちを見ると放つてはおけず、「親の代わりはできないが、姉として面倒をみます」と答えた。

最年少3歳のみどりちゃん兄妹、16歳の幸ちゃん姉弟4人、父親を現地召集で取られた節ちゃん兄妹3人、父が軍医として召集された姉妹2人の合計11人。親を亡くした悲しみはこの子たちも同じはずなのに泣き顔も見せない可愛い顔に「お姉ちゃんもよろしくね!」と言って、13人一緒に生活が始まった。

孤児たちは朝早く鍋を手に残飯拾いに出る。土の中に放り出されたジャガイモや大根の皮を拾ってくる幼い子たちの手に血がにじんでいる。それを洗う私の手もむくんで血がにじむ。味気のない残飯汁に少量の米と主食の油粕を混ぜたものを、空き缶の食器に一杯ずつ。物乞いに出た子供たちが持ち帰るキムチや粟飯を見て、思わず涙がこぼれた。日課になったシラミ取りでは、私は母ザルに

なった気分。夜は部屋に差し込む月明かりの下で、覚えているかぎりの昔話をしてあげ、童謡を全員で合唱した。夜中に「お母ちゃんオシッコ!」と呼ぶみどりちゃんを抱えてバケツにおしっこをさせながら、私も亡くしたばかりの母のことを思い出して泣いた。

3月も末になると、38度線を目指して寮を出ていく人が相次いだ。ある朝、いつものように子供たち全員を連れて団長の部屋に挨拶にいくと、そこはもぬけの殻。「先に行きます」のメモ一枚と米一斗だけを残して、団長は逃走(?)してしまつたのだ。

「どうするの?」と子供たちに聞かれて、「皆で38度線を越えて内地に帰ろうよ!」と言ってはみたものの、38度線がどこにあるのかもわからないし、地図もない。

3歳のみどりちゃん、4歳の俊坊、少しも私の手を煩わせることなく皆は今日まで頑張ってくれた。でも、明日からは何が起きるかわからない。

出発の朝は一握りの米と油粕を分けあって食べて寮をあとした。線路を歩き、山野をさまよい、雨に打たれながら、「もう歩けないよ!」と泣く子を背負い、お腹が空いたという子に川の水を飲ませながら歩き続けた。移動は夜、

昼間は林の中で眠る。食べられそうな草を集め、水を探し、一握りの米で水粥を作って一日一食の貴重な食事。でも、いつしか迷子や捨て子がついてくるようになって人数は増え、食糧も尽きかけた。

3ヵ月間の旅の最後に立ちあがったのは一本の川だった。見ると、暗闇の中で大人たちが両岸に渡された一本の電柱を渡っている。私は弟を先に渡らせ、自分は冷たい水の中に留まって、つるつる滑る電柱にしがみつくと子供たちを一人ずつ渡らせた。全員が渡り終えると、私は泣きながら川の中から這い出し、「ああ、皆全員渡つたのね」と、川岸のトウモロコシ畑の中に倒れ込んだ。翌朝、農作業に来た親切なアボジが、私たちを保安隊(朝鮮の警察組織)の小屋に連れていってくれた。旅の間大人たちから邪魔にされ邪険に扱われてきた孤児たちに、保安隊員が日本語で優しい言葉をかけてくれた。「子供の手でよくここまで来たね」

信 者 動 静

2017年7月～9月

(個人情報のため、削除しています)

犠牲献金
中高生会

5月21日 12,211円
(ペロニカ苑へ)
6月4日 12,140円
(ペロニカ苑へ)
7月2日 10,077円
(ペロニカ苑へ)
8月6日 3,500円
(ペロニカ苑へ)

待降節準備行事

外国語による
★12月2日(土) 待降節黙想会
指導司祭: Louie Luyun 神父
(神言修道会)
★12月3日(日) 待降節黙想会
指導司祭: 林 正人 神父
★12月9日(土)、10日(日)
赦しの秘跡 高木 健次 神父
大水 文隆 神父